



パロディとしての正義漢：『坊っちゃん』をめぐる 漱石とホトトギス派の写生文の抗争

福井， 慎二

(Citation)

國文論叢, 42:1-12

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011632>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011632>



パロディとしての正義漢

——『坊っちゃん』をめぐる漱石とホトトギス派の写生文の抗争——

福井 慎二

坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」⁽¹⁾とされるが、むしろ坊っちゃんは正義漢のパロディであり、その滑稽味の生じ方は実はホトトギス派の写生文の方法に基づく。ここで重要なのはホトトギス派の方法を重要モチーフの処理に用いたことだ。というのも漱石が、〈趣味〉の再認識という『文学論』の問題意識から、〈俳句趣味〉を絶対化するホトトギス派の独善的な写生文の考え方を相対化するからだけでない。漱石の写生文の方法はホトトギス派と異なるにもかかわらず、ホトトギス的方法で重要モチーフを処理するのは、漱石の理論や創作に大きな意味を持つはずだからだ。

本稿では、漱石文学で重要な道義的モチーフの処理の観点から写生文の『吾輩は猫である』（明治38年1月～39年8月以下『猫』と略す）と美文の『薙露行』（明治38年11月）と比較することで、『坊っちゃん』（明治39年4月）のホトトギス的方法の漱石文学における意味づけを目的とする。これまでの研究史で手薄だった『坊っちゃん』の写生文としての位置づけ、さらに漱石とホトトギス派の写生文の各方法の交渉という新しい観点からの漱

石文学の形成過程の一端が明らかとなるはずだ。

一、パロディとしての正義漢

『坊っちゃん』のホトトギス的方法の意味づけは次節で行ない、先ずホトトギス的方法がどのようなものかを漱石の方法と対比して確認し、正義漢のパロディぶりを見てみる。ホトトギス派の写生文は多様だが、滑稽味を生むメカニズムに注目すると漱石の写生文との相違が明らかとなる。ホトトギス派の「写生文は幾変遷したが、今日に至まで趣味に於て俳句趣味、技術に於て写生といふ事は一貫」（高浜虚子『俳諧一口壺』明治39年12月 全集12巻一七七頁）する。ホトトギス派の場合〈写生〉があるがまに見た描写ゆえに素材自体の持つ滑稽味に基づき、滑稽な素材を〈写生〉する物語内容のシステムとなる。

ホトトギス派の写生文の滑稽味を具体的にいくつか確かめてみよう。坂本四方太『鮒釣』（『ホトトギス』3巻2号明治32年11月以下雑誌名省略）では魚が釣れずにいたが、村人との世間話が佳境に入るたびに急に魚が釣れて話が中断する間の悪さの滑稽味

がある。これは設定自体の滑稽味である。

樂天生『募集一日記事（二月十一日）』（4巻6号明治34年3月）では、花火大会当日出場準備で多忙な「予」の家に隣村の新吾が訪ねて来て支障をきたす。

新吾は久し振りに膳の上にて共に一杯酌んで昼飯もすんだが中々談が永い、来て居る連中は待遠てたまらない、早く帰れは好いと云ふ様子である、新吾が帰るや否や次の間に一同ドット笑ふ声か聞へた、何かと思ふて見れば箒か一本立て、手拭をかむせてあつた、見れば長座の人を掃ふまじないだソーデ、案外早く功を奏したと云ふ

長居の人を帰らせる咒をいたずら半分に試すと意外にも効いた滑稽味がある。さらに会場の山村に行く途中、松の生えた絶壁で騒動が起きる。

政と云ふ若者と、寅と云ふ若者とが、あの松の上に登つて小便をしたならば如何にも好い氣持だらうと云ふと、貴様らにそれが出来るか、イヤ出来まいとて、出来る出来ないの、大争論が始まろうとした、然らば二人にて登つてたれて見よと、繁といふヘツツイ頭の親爺がまぜかへせし為め論も小便になつてしまつた

ナンセンスな度胸試し・意地の張り合いの滑稽味があるが、淡々と叙述している。

遼一『兵站部』（8巻3号明治37年12月）では、兵站司令部に鶏二十羽を「自分」が請求すると、副官は鶏が逃げて「十羽以上入居居る籠は一つもないが是は二十五羽入りと定めて居るのだから其中から五羽丈を差引いて渡さねばならぬ事になる、御覧の

通り三羽入り五羽入りの中から五羽を引けばゼロだ、只籠計り持て行かねばならぬ事になる」と言う。タテマエに囚われたナンセンスなお役所仕事の滑稽味がある。

これらの具体例は、滑稽な内容なのに読者を釣り込まない淡々とした観察報告のような書き振りが目立つ。『募集一日記事』の「予」も出場者なので新吾の長居に迷惑なはずなのに、仲間への咒のいたずらをまるで他人事のように扱っている。『兵站部』の任務を果たすことで精一杯の「自分」は、副官のナンセンスな理屈を滑稽に思う様子もなく淡々と聞く。このようにホトトギス派の写生文は、滑稽な内容を淡々と書くことに特徴がある。

一方漱石は、「大人が小供を視るの態度」（『写生文』明治40年全集16巻五〇頁）に喩えられるように、対象に〈距離〉を保ちつつも「傍から見て気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情」（『五一頁』）を持つ「作者の心的状態」（『四九頁』）に写生文の特徴があると指摘する。漱石の写生文の場合「作者の心的状態」は、滑稽味のない内容を滑稽に語る調子に表われる。物語内容に〈距離〉を取るからこそ滑稽に語れるのであり、極端な場合悲惨な事柄でも滑稽に語れる。漱石の方法は素材自体滑稽ではないのに言い回しで滑稽化し、如何に語るかという物語言語のシステムだ。

このように漱石の方法を考えるに当って問題点が二つある。一つ目は滑稽味のない内容の処理に限定して捉える妥当性だ。というのも漱石の方法を滑稽化する語りとすれば、滑稽な内容を真面目に語ることで一層滑稽となる場合も該当し、滑稽味のない内容に限定出来なくなるはずだからだ。しかしホトトギス的方法と対比しつつ、語的内容と語り方を相関させて本稿では漱石の方法を

捉えている。したがってホトトギスの方法が滑稽な素材・内容を「写生」する以上、漱石の方法を滑稽味のない内容に限定して滑稽化する方法として捉えることで対比されることになる。

対比的に捉えるならば、漱石の写生文にホトトギスの方法がいられるのは矛盾に見える。例えば駄洒落だ。寒川鼠骨「清どん」(4巻5号明治34年2月)では、床屋の清どんがカミソリの刃を欠いて弱つていると、客が歯医者を紹介し「口中一切ツて言ふから歯ならあすこだ」(傍点引用者、以下同じ)とからかう。

『猫』にもトチメンボーのような駄洒落がある。実のところ(俳句趣味)に基づくホトトギスの方法を用いても矛盾しない。というの漱石は(俳句趣味)を絶対化するホトトギス派の考え方を批判こそすれ、(俳句趣味)自体を否定しているわけではなく、漱石の写生文が(俳句趣味)を共有しても奇妙ではないからだ。

〈俳句趣味〉を共有しても、漱石の持ち味が独特の方法となつて表われたのが漱石の写生文だと言える。また漱石がホトトギスの方法を用いても単なる滑稽な設定に止まり、漱石文学のモチーフを漱石の方法で処理する場合、あるいはたとえホトトギスの方法で漱石文学のモチーフを処理してもホトトギス派の写生文と構造が異なる場合は、漱石独特の写生文となるから矛盾しない。

さて漱石の方法を考える上での二つ目の問題点は、写生文の「作者の心的状態」での作者と語り手の関係だ。写生文は一人称の語りに基づくことが多く、一人称の語り手が「作者の心的状態」を表わすと見なされる。しかし漱石の場合必ずしもそうならない独特さがある。例えば『琴のそら音』(明治38年5月)は、恋人がインフルエンザに罹ったことを「余」が友人に話すと、イ

ンフルエンザで死んだ妻の幽霊が夫に逢う話を聞かされ、さらにお手伝いの婆さんの迷信深さに脅かされて不安な「余」は一睡も出来ず、翌朝恋人を訪ねると全快していたという内容だ。恋人への想いに〈距離〉を取って自己相対化して「余」は滑稽に語っていないので漱石の写生文の語り手と言えない。にもかかわらず恋人の身を気遣うというそれ自体滑稽でない内容を真剣に「余」が語る程、傍から見ても微笑ましく思われるのは、作者が「余」を相対化しているからだ。その点からすれば『琴のそら音』の語り手「余」は「作者の心的状態」を表わしていないことになる。滑稽でない内容を真面目に語っても作者の相対化によって滑稽になる場合は漱石の方法となる。このように語る内容が語り手にとつて切実か否かで、写生文の滑稽味の生まれ方が左右される。

以上のことを踏まえると坊っちゃんは怒ったり真面目に語っているの、漱石の写生文の方法に基づかないと言える。⁴ここで『琴のそら音』も漱石の写生文の語り手ではないのに真剣に語る程滑稽味を生じたことから、『坊っちゃん』が漱石的方法に基づかないとは言えないという見方もある。しかし『坊っちゃん』の滑稽味は作者の相対化に基づくのではなく、坊っちゃん自身の設定や非常識な考えのような素材自体の滑稽味に由来し、それがホトトギスの方法なのである。⁵

『坊っちゃん』のホトトギスの方法を具体的にいくつか見てみよう。次の引用Aは、バツタ事件の事情説明を聞いて校長が坊っちゃんに声を掛ける場面だ。

A おれに向つて、あなたも無御心配で御疲れでせう、今日は御授業に及ばんと云うから、おれはかう答へた。「いへ、ちつ

とも心配ちやありません。こんな事が毎晩あつても、命の、あ、る間は心配にやなりません。(中略)「校長は(中略)然し顔が大分はれて居ますよと注意した。(中略)蚊が余つ程刺したに相違ない。おれは(中略)顔はいくら膨れたつて、口は慥かにきけますから、授業には差し支ませんと答へた。校長は笑ひながら、大分元氣ですと賞めた。(四 波線引用者以下同じ)

傍点部の「命のある間は心配にやなりません」と誇張した意地の張り方は滑稽であり、強がつて負けず嫌いの人柄を表わす。蚊に刺されて腫れて変な顔になつて授業すること自体既に滑稽であり、語り口ではなく設定自体の滑稽味があり、それで校長は笑つてゐる。

非常識な考えや奇妙な理屈の滑稽味もある。⁽⁶⁾物理学校を「自分でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ訳もないから大人しく卒業して置いた」(一)と、卒業出来ることに苦情を言おうとするような通常思ひつかない発想の滑稽味がある。顔色の悪いうらなりに向かつて「え、瘡せても病氣はしません。病氣なんてものだ嫌ですから」(七)と、理屈にならぬ奇妙な理屈で威張る例もある。また勤務初日の校長の訓示を真に受けて「到底あなたの仰やる通りにや、出来ません、此辞令は返します」(二)と言つて、タテマエを理解出来ないばかりか辞職しようとする行動自体滑稽であり、字義通り理解する滑稽味と言へる。

このように滑稽な設定に基づくホトトギス的方法によつて、坊っちゃんに正義漢のパロディとなる。というのも坊っちゃんに正義漢に似て非なる側面があるからだ。正義漢に見えるだけあつ

て確固たる倫理観を持つが、常識を転倒させたパロディに過ぎない。坊っちゃんの独特で滑稽な倫理観は次の引用Bの通りだ。

B 嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるもんか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る。(四)

一見潔い印象を与える。しかし坊っちゃんの倫理観は、ルール上認められた将棋の「待駒」(一)を使つた兄を「卑怯」(一)と思う性分に裏打ちされている。その性分から見れば引用Bは、いたづらを悪として否定するのではなく、小細工を嫌ひ正々堂々善でも悪でも行なうのがよいといった独特の信条を表わして一般道徳のパロディとなり、正義漢と似て非なるものとなる。さらに赤シャツは処罰からの逃げ道を用意しているので「鉄拳制裁でなくつちや利かない」(九)と山嵐が言うので、うらなりの送別会の後に「赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勧め」(九)たことから、正義漢に似て非なることは明らかだ。というのも暴力の正当性やうらなりに役立つか考えず感情にまかせて行なうのは、いたづら同然で正義の「鉄拳制裁」と似て非なるものだからである。

次の引用Cは、校長と赤シャツが学校の宿直を免除されるのは不公平なのに受け入れざるを得ないことに對する坊っちゃんの述べた。

C 山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るものぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさうなものだ。(四)

正しい事が必ずしも通るわけではないという世間常識に反して正

しい事は通るといふタテマエを真に受けたように見えるが、自分の不平不満に忠実なだけで利他的行為に結びつくわけではない。例えば師範学校との乱闘事件での坊っちゃん達の無実を納得したはずの校長が山嵐を免職するのを、坊っちゃんは初めから撤回させず、辞表を「堀田には出せ、私には出さないで好」と云ふ法がありますか（十二）と言うのは本末転倒であり、正しい事なら通ると信念を貫くわけではない。この点でも正義漢に似て非なるものと言える。

二、漱石とホトトギス派の写生文の抗争

本節では『坊っちゃん』のホトトギスの方法採用の意味づけを、道義的モチーフ処理の観点から美文の『薙露行』と写生文の『猫』と比較して行なう。というのも漱石の美文・写生文にはモチーフの処理の仕方の違いがあり、道義的モチーフの処理状態を通じて『坊っちゃん』の漱石文学での位置づけが出来るからだ。道義的モチーフには広範囲の内容が該当するはずだが、ここでは夫婦関係などの人倫、実業家・金持ち批判、また正直などの徳目に関わる事柄を特に指す便宜的名称にすぎない。

先ず一般的に美文は、表現上は理想化された美しいイメージで彩ったり対句などのリズム感によってモチーフを美化する。また内容上は明治の美文辞典に自然の風物の項目とともに忠孝・信義などの徳目の項目が並び、人事を扱う美文には教訓的コメントを挿む道徳的言説としての側面がある。倒錯的姦通心理の表現に特色ある『薙露行』は姦通という道義的モチーフを美化した〈姦通の美文〉であり、それは美文として自己矛盾となる。なぜなら人

事を扱う美文は道徳的言説の側面があるからだ。一般的に道義的モチーフを美文として処理する場合は、姦通のような不道徳的内容に批判的コメントを加える道徳的言説としてストレートに処理する。それに対して漱石の場合あえて姦通を美化して一見反道徳的に見えて、実は姦通の罪悪感のないギニヴィアとランスロットを作者が処罰するひねりを加えて美文として処理しているのだ。そこに『薙露行』の難解さがあった。

一方漱石の写生文の方法は語りによってモチーフを滑稽化し、ホトトギスの方法では滑稽なモチーフを〈写生〉する違いがある。『猫』のネコは、作中人物を罵倒・揶揄し「気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情」がない点で漱石の写生文の語り手ではない。代わりに苦沙弥・迷亭が各自のエピソードを滑稽に語ることで、漱石的方法を用いた写生文となる。⁸『猫』の道義的モチーフには、苦沙弥の実業家批判とそれに反発した金田の嫌がらせ、そして妻は夫に逆らう方がよいという迷亭の考えがある。金田は批判を軽くあしらう余裕もなく、苦沙弥が「怒るのは向が悪るいからで、先方が大人しくしてさへ居れば（中略）氣に障はる様な事もやめてやる。然し向が向なら此方も此方」（四）と意地を張るため、苦沙弥への嫌がらせの指示を金田自身が滑稽に語れるはずもない。したがって他のモチーフを漱石の方法で処理する苦沙弥・迷亭が道義的モチーフをどのように扱っているかが、『猫』の焦点となる。

ここで苦沙弥・迷亭の順にその処理状態を確かめてみる。次の引用は、苦沙弥が大きな鼻の鼻子をからかう「鼻の俳体詩」を作って迷亭に話している場面だ。

「第一句が此顔に鼻祭り、と云ふのだ」「夫から」「次が此鼻に神酒供へといふのさ」「次の句は」「まだ夫ぎりしか出来て居らん」(中略)「次へ穴二つ、幽かなりと付けちゃどうだ」と迷亭はすぐ出来る。(二三 傍点は原文のまま)

鼻子の「猫脊の鼻」(二三) 自体滑稽であり、それを俳体詩に用いればホトトギスの方法となる。からかい甲斐のある鼻の個性を取り上げず、単に「鼻」と一般化するだけでは滑稽ではない。しかし鼻を祀る祭に見立てることで滑稽となる。本来身体的特徴を茶化す失礼な言動なのに人身攻撃の不快感よりも滑稽味が勝るのは、鼻の個性を取り上げずにナンセンスな見立てでからかう邪気のない語り口に基づき、漱石の方法を示している。

このように鼻は茶化せたのに道義的モチーフでは打って変わる。「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さへ取れ、ば何でもする、昔で云へば素町人だからな」(四)「教師は無論嫌だが、実業家は猶だ」(五)と苦沙弥は蔑視し、実業家批判を滑稽に語る余裕はない。というのも苦沙弥の真剣な想いであつたからこそ滑稽に語れなかつたのだ。『趣味の遺伝』(明治39年1月)では、写生文の語り手の意向によってモチーフを処理するか否かを使い分けている。このことからすれば、語り手にとって重要・切実なモチーフか否かで漱石の方法による処理の有無が決まると言える。

しかし金田の嫌がらせを受けて実業家批判を苦沙弥は滑稽に語れる状況にないので、漱石の方法による処理の有無はモチーフの切実さに基づかないという見方もある。だが「元来こゝの主人は博士とか大学教授とかいふと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学

校の先生の方がえらいと信じて居る」(二三 傍点は原文のまま)と、金田の嫌がらせを受ける前から実業家を蔑視していたのをネコに暴露されている。したがって金田に嫌がらせされる前に実業家批判を滑稽に語る余地があつたわけではない。

漱石の方法に基づく処理を語り手にとっての切実さが左右するのを示す対照例がある。次の引用は、苦沙弥が大和魂を茶化す文章を朗読する場面だ。

「東郷大将が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居る。詐欺師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る」(中略)「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答へて行き過ぎた。」(中略)「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから常にふら／＼して居る」(六)

大和魂は忠君愛国という徳目に関わるモチーフだ。引用の主旨は、日本人すべてが持つ大和魂の定義はしにくいというそれ自体滑稽味のないものであり、ホトトギスの方法に基づかない。しかし大和魂を持つ日本人の具体例に「東郷大将」に止まらず本来含めるべきでない「詐欺師」などを列挙して、卑俗化・茶化すだけでない。大和魂がわかりにくいのを字義通り魂のように「常にふら／＼して居る」と表わすことで滑稽化している。このように素材自体に滑稽味がないのに、列挙法や隠喩的言い回しのような表現の仕方では滑稽化するのが漱石的方法だ。大和魂を茶化せて実業家批判は茶化せず、同じ道義的モチーフで対応が分かれるのは、語り手にとってのモチーフの切実さに基づくことを示す。

迷亭も苦沙弥同様にモチーフに応じて処理出来るか否か対応が

分れている。例えば「首懸の松」について次のように話している。

昔しからの言ひ伝へで誰でも此松の下へ来ると首が縊り度なる。(中略) どうしても他の松では死ぬ気にならん。(中略)

あ、好い枝振りだ。あの儘にして置くのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ないかしら(中略) 枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓る。撓り安排が実に美的である。首がか、つてふわ／＼する所を想像して見ると嬉しくて堪らん。(二)

「好い枝振り」に人間を下げた時の「撓り安排が実に美的」なこと自体は少しも滑稽ではなく、ホトトギスの方法に基づかない。

だが、死を茶化して不謹慎となるはずなのに、どこまで本気かわからないおどけた語り口によって不快どころか滑稽に感じさせる。

漱石の方法で「首懸の松」の死のモチーフを滑稽化しているのに、夫婦関係といった人倫を迷亭は滑稽化していない。苦沙弥夫婦の口論に迷亭は次のようにコメントしている。

昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだつて云ふが、夫なら啞を女房にして居ると同じ事で僕などは一向難有くない。(中略) 同じ女房を持つ位なら、たまには喧嘩の一つ二つしなくつちや退屈で仕様がなからな。(六)

苦沙弥の妻を羨み、妻は夫に逆らう方がよいと人倫に反した主張を茶化さずにするのは、からかい甲斐のある妻を迷亭が欲しがっているからだ。このコメントに続けて妻が夫に従順な頃の女の不品行の例として、迷亭は女児を売る話をしていつものように人を担いでいる。それによってこのコメントが茶化されるわけではない。というのも如何にも品行かわからず、単に脱線したエピソードに過ぎないからだ。

ドに過ぎないからだ。

以上から道義的モチーフ処理の点で『薙露行』と『猫』は対照的となる。というのも漱石文学で重要な姦通という道義的モチーフを『薙露行』が美文として処理しているのに対して、同じく重要な実業家批判のモチーフを『猫』が写生文として処理出来ないからだ。ここで道義的モチーフを滑稽化しないのは倫理的漱石像と合致するのか、あるいは道義的モチーフの美文としての処理は倫理的漱石像を補完するのか疑問が生じる。それを解く鍵が『坊っちゃん』の正義漢のパロディだ。というのは次の通りだからだ。『猫』で出来なかつた実業家・金持ち批判の写生文としての処理自体は、『二百十日』のホトトギスの方法で実行されているという見通しがある。その見通しは、正直などの徳目といった漱石文学の重要な道義的モチーフが『坊っちゃん』のホトトギスの方法によって処理可能となった成果に基づくと考えられ、それは漱石の倫理性を示すことになるからだ。即ち漱石の倫理性とは、道義的モチーフを滑稽化してなお倫理的であるということにほかならない。

さて坊っちゃんにとって切実な道義的モチーフのホトトギスの方法による処理をいくつか確認した上で、漱石文学にとってのホトトギスの方法採用の意味づけを行なう。前節の引用Bは自らが「卑怯」(四)でないのを威張り、坊っちゃんの性分に基づく切実な倫理観を示す。しかし「罰があるからいたづらも心持ちよく出来る」と罰を受けるか否かで気持ちよく出来るいたづらと「生意気な悪いいたづら」(四)とに区別することで、いたづらを禁止する道義的メッセージが滑稽化・無力化されるだけでない。引用B

が含む「いたづらをしたつて潔白」(四)であるべきというメッセージも茶化されてしまう。このように罰があるから気持ちよくいたずら出来るという本末転倒の発想やいたずらの善し悪しを分ける発想の滑稽味などのホトトギス的方法が、漱石文学で重要な道義的モチーフを滑稽なモチーフへと変えている。

次の引用Dは呐喊事件で生徒を懲らしめられず、坊っちゃんに困っている場面だ。

D 宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、(中略)仕方がないから泣寝入りにしたと思はれちや一生の名折だ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな百姓とは生れからして違ふんだ。(中略)どうしてい、か分らないのが困る丈だ。(中略)正直だから、どうしてい、か分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考へて見ろ。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つ迄こゝに居る。おれはかう決心をした(四 傍線引用者、以下同じ)

傍点部の坊っちゃんの重視する正直は、国定修身教科書の格言「正直ハ一生ノ宝」(文部省『尋常小学修身書第二学年教師用』明治37年)で肯定される徳目だ。だが、正直は不正に勝つという坊っちゃんの信念は、生徒を懲らしめられず血統まで持ち出して強がる性分と結びつき独特なものになっている。即ちその信念は傍線部の尻取り文で執念深さを示し、波線部の生徒の籠城する部屋の前に弁当を取り寄せて生徒が謝罪するまで居座るといふ、それ自体滑稽で子供じみた根競べの形を取る。子供じみた根競べの

滑稽な設定や、「正直だから、どうしてい、か分らない」というナンセンスな理屈などのホトトギス的方法によってこの信念は、道義的メッセージに似て非なる滑稽なものになっている。

ところで坊っちゃんにとつて切実な道義的モチーフなのに未処理の例がある。次の引用Eは、前任者を陥れた者の名前を坊っちゃんに赤シャツが答えようとしなない場面だ。

E 「だれと指すと、其人の名譽に關係するから云へない。(中略)どうか氣を付けてくれ玉へ」「氣をつけたつたつて、是より氣の付け様はありません。わるい事をしなけりや好いんせう」赤シャツはホ、ホ、と笑つた。(五)

傍線部の坊っちゃんの主張は、国定修身教科書の悪を戒める格言「善ハ小ナリトモナサザルコトナカレ、惡ハ小ナリトモナスコトナカレ」(茨城県師範学校附属小学校編『国定教科書教授細目』明治37年)と重なり、それ自体滑稽ではない。特に写生文として処理していないのに波線部で赤シャツが嘲笑するのは、単純すぎる主張だからだ。坊っちゃんが作中人物に笑われるのは、奇妙な理屈や滑稽な素材のホトトギス的方法による場合がほとんどだ。例えば前節の引用Aで腫れて変な顔と坊っちゃんの奇妙な意地の張り方が校長に笑われている。道義的モチーフの嘲笑は引用E以外にない。したがって引用Eの道義的モチーフの未処理は『坊っちゃん』のホトトギス的方法運用の一貫性の欠如ではなく、むしろ坊っちゃんの信念を嘲笑する存在に赤シャツを位置づける働きをしていると言える。

さて『坊っちゃん』のホトトギス的方法の意味づけは①③の三点ある。先ず『猫』で処理出来なかつた重要な道義的モチーフ

をホトトギスの方法で処理出来たことから、①漱石の方法の限界を示すことになる。漱石的方法が語り口によって滑稽化する以上、語り手にとって切実なモチーフを処理出来ないことを『猫』は表わし、坊っちゃんの倫理観も性分に根差して切実ゆえ滑稽に語れない。それならば『琴のそら音』で道義的モチーフ以外の切実なモチーフを処理出来た、作者の相対化によって滑稽味を生じる方法を用いないのはなぜか。切実な道義的モチーフは作者の相対化でも処理出来ないからだ。例えば山嵐のような比較的常識的な正義漢が自らの倫理観を真面目に語る程、作者が相対化して滑稽にするのは設定上無理がある。したがって重要な道義的モチーフの処理にはホトトギスの方法以外なく、その点で坊っちゃんが正義漢のパロディとなるのは必然であった。

自らの方法の限界によって重要モチーフの処理にホトトギスの方法を用いるのは漱石の敗北に見えるが、むしろプラスの意味づけが二点出来る。それは②道義的モチーフ処理にホトトギスの方法を用いること自体新しい試みであることだ。というのもホトトギス派は道義的モチーフ処理にホトトギスの方法を用いていないからだ。管見に入ったホトトギス派の写生文約九〇編(明治32、38年の雑誌『ホトトギス』掲載の一般投稿と高浜虚子・坂本四方・寒川鼠骨・河東碧梧桐の作品)のうち滑稽味のある作品は三分の一に満たず、それらすべてホトトギスの方法を用いているが、実業家批判・夫婦関係のような人倫・徳目に関する事柄を処理していない。したがって漱石が『坊っちゃん』で道義的モチーフ処理にホトトギスの方法を用いたのは新しい試みとなる。ホトトギスの方法の滑稽化する対象を拡大し写生文を豊かにしたことに意

義がある。ホトトギスの方法は『猫』にも用いられているが、死のモチーフや重要な道義的モチーフ処理に用いられていない。

もう一つのプラスの意味づけは、③『文章一口話』(明治39年11月)で批判することになるホトトギス派の方法を『坊っちゃん』の重要モチーフ処理に用いたことで、『写生文』(明治40年1月)にまとめられる理論の普遍性が確認されることだ。これが漱石の写生文理論上の『坊っちゃん』の位置を示す。ホトトギス派では「俳句を作った事のない人の写生文はどうしても俳趣味が乏しい。其為め写生文としての価値も少ない」(虚子「俳諧一口断」明治39年10月 全集12巻一七〇頁)、「俳句の標準を以て見たならば、現代の小説(中略)等、一として満足すべきものは無い」(四方太『文章談』明治39年7月9巻10号)と、「俳句趣味」を絶対的価値あるものとする。それに対して漱石は「写生文と普通の文章との差違を算へ来ると色々ある。色々あるうちで余の尤も要点だと考へるにも関らず誰も説き及んだ事のない」(『写生文』全集16巻四八、四九頁)ものとして「作者の心的状態」を指摘する。この指摘は、ホトトギス派の写生文の重要概念の「俳句趣味」を用いずに代わりに「作者の心的状態」で写生文を規定することで、「俳句趣味」を絶対化するホトトギス派の独善性の批判となるだけでない。「作者の心的状態」が漱石のみならずホトトギス派の写生文にも当てはまる普遍性を持つことを意味し、それが独善性批判を可能とする。

「作者の心的状態」を前節で対象に「距離」を取ることと捉えたが、その「距離」は共通点であっても、漱石とホトトギス派では方法を異にする以上具体的表われ方は異なる。語りを方法とす

る漱石の場合、物語内容に対して語り手が〈距離〉を取るからこそ滑稽に語れ、その点で〈距離〉には滑稽化の機能がある。ホトトギス派の場合「作者の心的状態」は、〈俳句趣味〉の一側面を捉え直したのと言え。四方太は「俳句趣味といふよりも、非人情といった方が俳句を知らぬ人には却てよく解るかと思ふ。」

「何処までも天然を本として行つて、人情の奥まで深入りせぬのを非人情といふやうに解する」(『文話三則』明治39年12月10巻3号)としている。虚子も「俳句の詠する美はもと自然的であつて、よし人間でも、宛も自然物の如く表面上の美のみに目を着ける」(『写生文の由来とその意義』明治40年3月 全集12巻一八四頁)としている。つまり〈俳句趣味〉には人事を扱つても人情に深入りせぬ〈距離〉を取る態度としての側面がある。したがつてホトトギス派は〈写生〉を方法とするゆえ、「作者の心的状態」は写生対象と一人称の写生主体との〈距離〉として表われる。ホトトギスの方法では、表面的で深入りせぬ態度ゆえに滑稽な人間の言動・出来事を対象として選ぶことが出来、素材自体の滑稽味を〈写生〉することになる。

ここで「作者の心的状態」が〈俳句趣味〉の単なる言い換えにすぎず、ホトトギス派の独善性批判にならぬという見方もある。しかしホトトギス派の絶対化する〈俳句趣味〉という言葉を用いずに写生文を規定すること自体充分批判たり得る。また〈俳句趣味〉の否定ではないので、「作者の心的状態」が〈俳句趣味〉の捉え直しなのは当然とも言える。

漱石とホトトギス派に当てはまる普遍性は、『文学談』(明治39年9月)の次のコメントが「作者の心的状態」を示唆し、ホトト

ギスの方法に基づく『坊っちゃん』にその「作者の心的状態」を指摘出来、〈距離〉が共通点となることで確認される。

坊っちゃんといふ人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だなど読者が感じて合点しさへすれば、それで作者の人世観が読者に徹したと云ふてよい。(中略) 現実世界に在つて鼻の先であらうつて居る様な坊っちゃんにも中々尊むべき美質があるではないか、君等の着眼点はあまりに偏頗ではないか、と注意して読者が成程と同意する様にかきこなしであるならば、作者は現今普通人の有してある人生観を少しでも影響し得たものである。(全集25巻一八〇頁)

漱石のコメントは坊っちゃんの実質の指摘よりも、むしろ写生文の観点からすれば傍線部のように同情しつつ欠点を認める対象との〈距離〉の取り方の指摘と捉えられる。坊っちゃんの「欲がすくな」(二)く「竹を割つた様な気性」(七)はうまくいけば長所になるが、「肝癪が強過ぎて」(七)喧嘩するのを奇妙な理屈や滑稽な倫理観で正当化する欠点のあることを、その設定から読者は読み取る。このように長所・短所を示すように作者の選んだ人柄・倫理観の設定は、作者が坊っちゃんに〈距離〉を取っていることを示す。同情しつつ欠点を認めるやり方は〈距離〉を取りつつも同情する「作者の心的状態」に等しく、漱石の理論は普遍性を獲得する。しかし『坊っちゃん』の独特さも明らかだ。

というのも作者が坊っちゃんに〈距離〉を取ることは、ホトトギス派の「作者の心的状態」の図式に完全に合致するわけではな

いからだ。即ちホトトギス派では作者は一人称の写生主体と一体化して写生対象に〈距離〉を取るが、『坊っちゃん』はそれと異なる。このように純然たるホトトギス派の写生文となっていない『坊っちゃん』を通じて漱石の理論の普遍性を確認するのは矛盾に見える。しかしホトトギスの方法での「作者の心的状態」の〈距離〉には、滑稽な設定の選択を可能とする働きがある。作者は坊っちゃんに〈距離〉を取って長所・短所を読者に感じさせる滑稽な設定の選択をしている。したがって〈距離〉の機能の点で『坊っちゃん』はホトトギスの方法と合致し、漱石の理論の普遍性は確認出来る。ところで作者が一人称の語り手坊っちゃんを相対化する点で『琴のそら音』のような漱石の写生文の方法に基づくようにも見える。だが、坊っちゃんが滑稽な倫理観などを真面目に語っている点で漱石の方法と異なる。結局『坊っちゃん』は従来の漱石の写生文の方法の枠に収まらず、ホトトギス派の写生文とも異なる独特な構造になっている。

滑稽味を生むメカニズムとしてホトトギスの方法を用いても『坊っちゃん』がホトトギス派の写生文と異なる独特なものとなることは、写生主体となるべきは坊っちゃんの叙述態度がホトトギス派と異なる点でも言える。前節で見たようにホトトギス派の写生文は、他人や自分の言動が滑稽なものであっても淡々と報告する態度で一貫している。これを〈写生〉と呼ぶならば、坊っちゃんは他人の言動に批判的コメントをつけ、〈写生〉になっていない。例えば次の引用Fはバツタ事件の処分を決める職員会議での校長の発言場面だ。

F 狸は例の通り勿体ぶつて、教育の生霊と云ふ見えてこんな意

味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致す所で、(中略) 自分はよく是で校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪へんが、不幸にして今回も亦かゝる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。(中略)」かう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不徳だとか云ふ位なら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたら、よさ、うなもんだ。(中略) もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治れば夫で沢山だ。人の尻を自分で脊負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹れ散らかす奴が、どこの国にあるもんか(中略)彼はこんな条理に適はない議論を吐いて、得意氣に「同を見廻した。(一六)

傍線部の馬鹿にしたような滑稽な比喻で始めから枠付けて校長の発言を紹介し、校長のタテマエの発言を字義通り受取って傍線部のように坊っちゃん独特の滑稽な喩えの形で理解した上で、傍線部のように批判的に発言振りを描写しているのは〈写生〉と異なる。

以上から『坊っちゃん』の試みと成果が明らかとなった。『猫』で出来なかつた実業家批判の処理自体は『坊っちゃん』の試みを経て『二百十日』のホトトギスの方法で実行出来たと考えることでも、『坊っちゃん』の成果の意義は増すはずだ。もちろん『二百十日』の処理を確かめなければならないが、それには『野分』『虞美人草』が道義的モチーフを如何に処理し、写生文・美文から脱皮したか考える必要もあり、今後の課題としたい。

注

- (1) 丸谷才一『闊歩する漱石』講談社 平成12年 一〇頁
- (2) 拙稿『文学論』から作品へ―漱石〈写生文〉論（『弘前大学国語国文学』20号 平成10年）
- (3) 拙稿「漱石『琴のそら音』論―インフルエンザの近代文学史」（大阪芸術大学『河南論集』6号 平成13年）
- (4) 好川佐苗氏はアレゴリカルな人物造型によって感情移入出来ぬ読者は、坊っちゃん・山嵐らと距離を取って笑ひ、写生文的態度になっていると指摘（『坊っちゃん』における〈名〉―そのアレゴリ的世界』『梅光学院大学論集』40号 平成19年）しているが、漱石の考える写生文の「作者の心的状態」の表現方法として物語言説・物語内容の点から捉える本稿と立場を異にする。
- (5) 有光隆司氏は「バツタ事件」と、じつに愉快で滑稽な小事件が次から次へと飛び出し、読者を一種痛快な笑ひの世界へと誘う。男ははじめにおかしな話をするので、いっそう愉快さは増幅される（『坊っちゃん』の構造―悲劇の方法について）『国語と国文学』昭和57年8月号）と指摘しているが、語り口よりも事件・設定の滑稽味が主となっている。
- (6) 小森陽一氏は「語り手が示す理由は、（常識ある他者）にとつては、まったく理由などにはならぬしろものであり、それをもっともらしく真面目に語る語り手の姿に、思わず〈笑ひ〉が洩れてしまう」（『坊っちゃん』の〈語り〉の構造―裏表のある言葉）『日本文学』昭和59年3・4月号）と指摘している。
- (7) 拙稿「姦通の美文―漱石『薙露行』とテニス、マロリー」（神戸大学『国文論叢』38号 平成19年）
- (8) 拙稿「吾輩は猫である」論―『文学論』から写生文へ（大阪芸術大学『河南論集』5号 平成11年）
- (9) 拙稿「変奏する写生文の構造―漱石『趣味の遺伝』論」（大阪芸術大学『河南論集』7号 平成14年）で『猫』はモチーフによって写生文的処理を使い分けないと指摘していたが、道義的モチーフの未処理を見落としており、『趣味の遺伝』同様使い分けていると修正すべきだ。そうすることでより単純化した図式となる。
- (10) 山下航正氏は漱石の写生文を主観・客観の観点から捉え、『坊っちゃん』と『坑夫』のつながりを指摘（『坊っちゃん』論―写生文、あるいは一人称回想への眼差し）広島大学『国文学攷』167号 平成12年）している。
- (11) 注6の小森氏は坊っちゃんが美質を失っていると指摘する。
〔付記〕尚、テキストは『漱石全集』（岩波書店 平成5・11年）、『定本高浜虚子全集』（毎日新聞社 昭和49年）を使用。旧漢字は新字体に改め、ルビは削除した。引用の修身書は国立国会図書館近代デジタルライブラリーに拠る。
（ふくいしんじ／大阪芸術大学非常勤講師）